

我思ふ

宗宮 重行

ノーベル 化学賞

私はノーベル化学賞の推薦に関して 長年にわたり推薦の依頼があり自分なりに考えて 科学者をノーベル化学賞委員会に推薦している。 200年用も用紙が来た。

200年のノーベル賞はどなたが受賞されるのか今の時点ではわからない。 毎年 10月 1日前後に賞選考委員会から発表される。 手許には文献 1~ 5がありこれらは我々科学者に参考になることが多い またノーベル賞に関する解説 物語などがある^{6~ 9)}。

ノーベル賞の物理賞 生理学医学賞については私は推薦したことがないのでよく知らない。 化学賞については、毎年 9月頃推薦して欲しいという依頼がくる。 推薦は 1年単位で 今年依頼が来たから来年もということではないようである。

化学賞の推薦で私の伺った時は約 1000人の世界中の科学者に推薦を依頼しているとの事であった。 この依頼は化学界の個人に推薦を依頼しているということで 学会、大学 研究所 研究会単位の推薦を期待しているのではないという。 第 1回の審査会で約 250人にしほりそれから 1~ 3人に会議を重ねて絞って行くという。

いまでは 1人の候補者よりは、3人位までのグループがよいといわれている。 3人までの候補者はグループとして推薦できる。 私は 1人がよい か、3人がよい か、3人までは 1件として推薦できるが どちらがよいかはわからない。 なお Faxや Electronic mailは使用しないようにということになっている。

アベリアノーベル会議議長は^{3,4)}、なるべく早い時期に他国の研究所で研究に従事するとそれまでの自分とは異なる仕事の仕方 発想にふれることが出来る。

海外留学後 母国のリーダーになり、海外との国際交流が活発になる。 海外との国際交流により 建設的な発想が生れる。

ノーベル賞は独創性を人類のために使った人に贈られる どんなに優秀な研究者でも 新しい発見をしなればノーベル賞は授与されない。 新しい発見をするには オープンな

発想による交流が必要である。 推薦に関してはいろいろな方に推薦依頼状を送り、推薦を依頼する。 この書類は今迄の場合 毎年 9月末に私の手許に到着する。 締切は翌年の 3月末で 毎年同じであった。 私は東京からスエーデンのノーベル賞委員会に書類を送るには、Fedexで 5日間程かかると考えている。

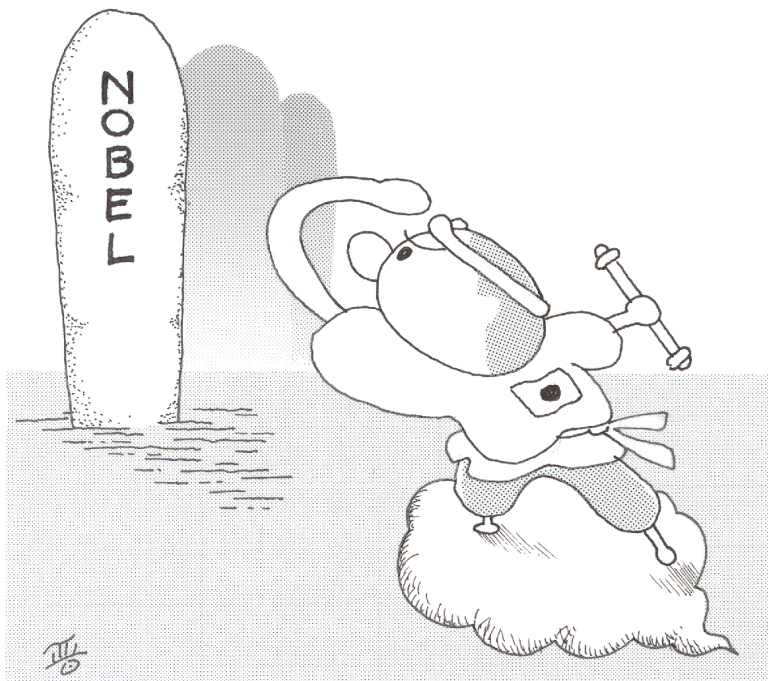
公式の推薦依頼状によらない個人の勝手な推薦は一切受けない。 評価について 1~ 3番にわけて作業を進めるといいうことである。

レベル 1は今年に始めて推薦を受けた人で 今年の受賞になりそうにない人。

レベル 2はここ数年推薦を受けている人で よりつ込んだ評価をする。

レベル 3は今年の受賞者として真刻に評価する人ということである。

これは医学・生理学の分野の賞の選考方法だけなのか



イラスト・外村晋一郎

私は知らない。

ノーベル賞は最初の発見があつてから、10年以上の長い期間を経て誰が真の発見をしたかを評価する。

ノーベル賞はその年に行われた発見に対し授与されるものではない。 この業績が本当の意味での新発見と呼ぶに値する業績なのか？ その重要性を見極める、この確認に 検証に 10年位はかかる。

日本の科学者に対しては よりよい研究環境を 若い研究者にもっと独立性を 国際交流を今よりずっと増やすこと

女性の研究者を増やすことなどを述べている。

有本健男⁵⁾はノーベル賞 2世紀受賞者増大をめざしてと題した記事を述べている。 第 1図にノーベル賞受賞者数の推移と 第 2図に世界の科学論文と引用度の高い科学論文に占める日本の割合を示している。

朝日新聞 200年 月 2日夕刊 4版窓 論説委員室にノーベル賞 30人と題した記事がある⁶⁾。 日本人の推薦活動に消極的な理由として

日本人には謙譲の美德があり自分や知り合いを推薦することをほしたないと感じる人が多い。

日本人は身近な人の成功をねたむ傾向が強く 同じ日本人を推薦する気になれない。

日本の大学には成果を競い合う風土がなく 受賞者を出したいという意欲がない。

適切な推薦には 何が意義深い研究なのかと見極める能力が必要だが その自信のない研究者が多い。

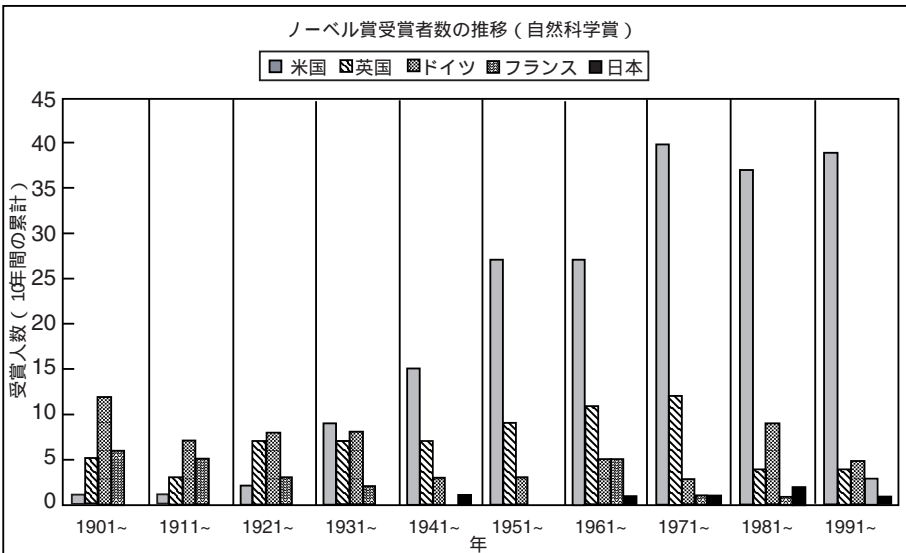
語学力に問題があり 英語の手紙に英語で返事を書くのがおっくう。

と仮説を述べ 科学技術基本計画の「 30年間で 30人程度のノーベル賞受賞者を出す」という目標は研究費をつぎ込むだけでは達成出来ない」と改めて思う

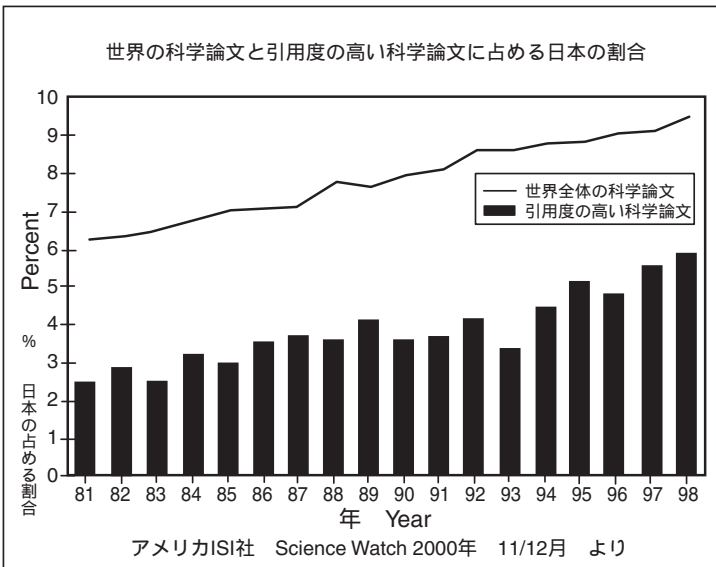
と述べている。 これらも日本人のノーベル受賞者の少ない理由の一端かも知れない。

ノーベル賞の推薦は 日本学士院賞の推薦と異なり ノーベル賞委員会からの個人への依頼により行われる。 従って大学や研究所など団体の推薦はないという。

日本学士院賞の推薦は 大学長 部長 研究所長などが出来るが ノーベル賞はあくまで個人の推薦である。 ノーベル委員会からの推薦依頼状 推薦時の注意事項 推薦用紙などが私の手元に届く(第 2図)。 私の場合 推薦書 2枚の他に 略歴 文献リスト 特記すべき詳細な研究業績、など付属文書をつけて、3月末日までにスエーデンに書類が到着するように提出してる。



第 1図



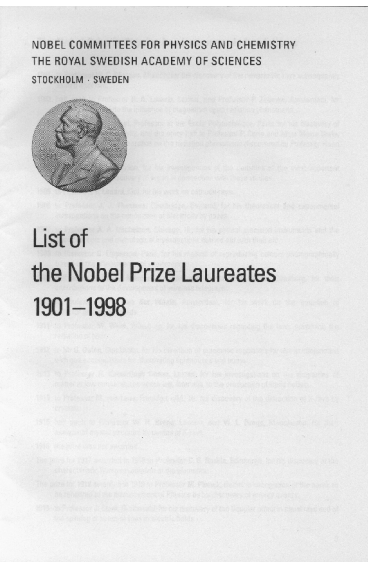
第 2図

A. E. カール (科学新聞 200年 月 1日)²⁾は「ノーベル賞への旅」の中でノーベル賞を日本人が獲得するためには

- 幸運であること
- 直感を大切にすること
- 自分や他人のデータに批判的な態度で臨むこと。
- エキサイティングな仮説を立てること
- 一生懸命働くこと

と指摘している。

ノーベル賞は 長年にわたる研究業績の積み重ねというよりは 新しい発見をした独創性を人類のために使った人に贈られる賞で 世界的な新発見ということになっている^{3,4)}。 ノーベル賞受賞者は基礎科学の分野で 新しい発見がなければならぬ。 長年にわたる研究成果の積み重ね 世



第 3図

界的な有名教科書や 研究書などの出版などで学会の賞を頂いても、ノーベル賞を頂くことには困難がある。

今後の日本はどうすればよいのか？ 有本健男は⁵⁾は競争的な研究環境を整え 人材の流動性と若い科学者の活動の場を増やすことにより 日本科学レベルは世界に劣らないものにな

らだろう。 受賞者の陰にかくれている人々の理解を深めるために候補になった科学者にも光をあてることも重要で 個人を評価し学会賞を出して表彰して行くことも必要であるうと述べている。

私は日米セミナーの手伝いを 1969年にし また多数の国際会議を多くの方々に支えられて日本で開催して来た。 第 1回から続いている国際会議としては Hydrothermal Reactions (1982年が第 1回で現在は第 10回が 200年頃開催予定) Mullite(第 1回は 1988年)Advanced Ceramics (1983, 1986, 1988) Advanced Materials (1988, 1993) Densification and Sintering (1978) など日本からの科学と技術を発信し 日本を知ってもらうことに 日本語の圖書を約 50冊 英語の本を約 50冊編集し 出版して来た また多数の国際会議の顧問をして外国の人々に日本の科学と技術の現状を理解してもらおうと共に 日本を知って頂くことに努力し このための時間と経費をついやして来た。

ノーベル賞を日本に引きよせるためには 個人の業績と共に 研究室 研究所 大学 地域の雰囲気 環境なども さらに文化なども重要な要素である。

国際的研究業績を挙げた科学者を顕彰し その志と情熱、創造性と努力を世の中に知らしめることは 今迄以上に今後益々必要になってくる。

謝辞

(株)科学新聞社社長池田富士太氏には いろいろな資料を頂き それらの資料を引用した ここに記して厚く感謝する。

文献

- 1)吉川弘之 江崎玲於奈 井村裕夫 長倉三郎 小田稔 座談会ノーベル賞と日本を考える 科学新聞、1999年 10月 1日 277号、10月 2日 277号。
- 2)A. E. カールソン ノーベル賞受賞者カールソン博士講演日本人研究者にアドバイス科学新聞 200年 月 1日

284号。

3)アニターアベリア 研究者の研究活動ノーベル賞の精神と最近の事情テーマに科学新聞 200年 月 2日。

4)同 ノーベル会議議長来日科学新聞 200年 月 2日 285号。

5)有本健男ノーベル賞 2世紀受賞者増大めざして 上 中、下 科学新聞 200年 月 1日 283号、月 1日 283号、月 1日 283号。

6)論説委員室から 窓 ノーベル賞 30人朝日新聞 2001年 月 2日夕刊 4143号東京 4版。

7)矢野暢 ノーベル賞 - 二十世紀の普遍言語 中央公論社(1988)。

8)ニコラス・ウェイド 丸山工作 林泉訳 ノーベル賞の決闘、同時代ライブラリー岩波書店(1992)33頁。

9)科学朝日編 ノーベル賞の光と陰 (1982)。

10)梅田寅夫 あなたも狙え!ノーベル賞 化学同人 286頁(1995)。

11)ノーベル化学賞委員会から送付された資料。

追記)

最近東京大学大学院岡本拓司から「ノーベル賞文書からみた日本の科学」、190年から 1948年 - (1)物理学賞・化学賞 -、(1)生理学 医学賞 (北里柴三郎から山極勝三郎まで) 科学技術史 第 3号、87-128(1999)第 4号、1-6頁(2000)を頂いた。

この文献によると 物理学賞 化学賞の推薦を行なう資格は以上の人々に与えられている。

- (1)科学アカデミーの会員(外国人も含む)
- (2)物理学賞の委員会 化学賞委員会の構成員
- (3)過去の物理学賞 化学賞の受賞者
- (4)北欧の大学およびそれに相当する物理学 化学の教授職にある者

- (5)外国の物理学科 化学科の長(最低 6件)
- (6)特別に招待された個人

生理学・医学賞では (1)カロリンス研究所の教授職にあるもの

- (2)科学アカデミーの医学部に属する会員
- (3)過去の生理学賞・医学賞受賞者

- (4)ウプサラ大学 ルンド大学 オスロ大学 コペンハーゲン大学 ヘルシンキ大学の医学部の教授会構成員

- (5)(4)で指定された以外の大学の医学部の教授会構成員(最低 6件)

となっており、(1)~ (4)までは終身資格であり、(5)、(6)は毎年更新される。

推薦依頼を受ける人の総数は 毎年 500から 1100になるという。

190年から 1948年までの日本人の推薦に関して この論文は詳しく記述してある。

謝辞

東京大学大学院岡本拓司に感謝する。